

1920年代前期における学生運動の諸相（下）

——京都帝国大学社会科学研究会を中心に——

福家 崇洋†

1920年代前期における学生運動の諸相（上）

（『京都大学大学文書館研究紀要』第9号掲載）

はじめに

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| 1 日本共産党と青年運動 | 3 「方向転換」から「現実化」へ |
| 1-1 「秘密団」と学生連合会 | 3-1 党再建とビューロー |
| 1-2 党青年部と日本共産青年同盟 | 3-2 学生運動における左傾化の影響 |
| 1-3 京都における共産党の影響 | 3-3 無産階級運動の一翼として |
| 2 「大衆化」する学生運動と京大社研の創設 | ——学連第2回大会 |
| 2-1 党活動の挫折と「大衆化」 | |
| 2-2 京大社研と東大新人会 | |
| 2-3 学連第1回大会 | |

4 労学提携の動きと「レーニズム」の浸透

4-1 ビューロー会議とユース

学連第2回大会が開かれた約1週間前（1925年7月9日）、ビューローのメンバーは党再建に向けて会議を開いた⁽¹⁾。参加者は水谷（徳田球一）、アサノ（渡辺政之輔か）、キムラ（花岡潔か）、ウエムラ（間庭末吉か）であり、青木（荒畑寒村）は病気のために欠席、6月末に上海から帰国した花田（佐野学）は東京での地下生活のため不参加であった。

ここに辻井民之助の名前はないが、7月頃、ビ

ューロー員「Ota」と「Yamaguti」（太田は辻井、山口は佐野文夫か）が「サボタージュ（sabotage）」していたと報告されており⁽²⁾、辻井は京都の労働運動では左派として活動していたものの、ビューローとは一線を画していた可能性がある。

7月会議での議事は、無産政党組織に向けて委員会を構成すること、無産政党綱領、青年運動などであった。この時期は、無産政党の結成が焦眉の課題であり、「無産政党を結成せよ！」といった政治運動のスローガンの決定や、40人の同志がただちに東京大阪に動員されるべきこと、運動では農民と労働者が手を携えなければならないこ

† 京都大学大学文書館助教

となどが決まった。

ビューローは9月13日にも会議を開いた⁽³⁾。おそらく、この会議をもって、党再建に向けた体制が整えられている。このときの報告書をまとめると、議長「花田」のもとで話しあわれたのは「日本共産主義グループ (Japanese Communist Group) の組織と活動」のほかに、プロパガンダおよびアジテーションの活動、無産政党、労働組合左派などに関してである。

このうちもっとも大事なものは、JCGの組織と活動であった。在京の7名から構成される中央ビューローを置くなど組織に関する事項がならぶ。なかでも「The "Union for Workers' Education" will function as the legal organization of the Communists.」(労働者教育組合は共産主義者の合法的な機関として機能するだろう)と書かれているのは興味深い。というのも、後述するように、この労働者教育に学連所属の学生たちが動員されていくからである。この7月会議のときには、JCGメンバーの改編もおこなわれ、手書きで「Aoki, Noda, Hanada, Mizutani, Sugiura, Watanebe, and Schirai」とあり、順に荒畑、佐野文夫、佐野学、徳田球一、杉浦啓一、渡辺政之輔、間庭末吉であると思われる。

翌日に新ビューローの会議がもたれ、体制が決まった。まず党細胞(東京に5、大阪に1、神戸に1、計23名)が作られたほか、候補者のための細胞(東京に3、大阪に1、名古屋に1、神戸に1、計15名)も作られた。新設されたビューローの各部門の責任者は、以下のように決まったという(()は原文のママ)。

総務幹事水谷、政治部長花田、アジプロ部長花田、組織部長水谷、情報部長杉浦、大阪神戸支部長〔Director〕青木、共同編集委員会〔The Joint Editorial Commission〕花田(議長)、青木、水谷、渡辺、野口(ユース)、山口、西、レーニン選集翻訳委員会 山川〔均か〕、

山口、西、花田

本稿との関係では、青年運動、すなわちユース(第2次)結成に向けて何が話しあわれたかである。その結成準備についてはすでに徳田球一の供述調書を紹介したが、北浦千太郎の供述にも詳述されている。

北浦によれば、同年7月、徳田球一、渡辺政之輔、北浦千太郎が集まり、無産青年運動の行動綱領骨子を決定し、中核となる人物の推薦をおこなった。この会合ののち、徳田と渡辺がそれぞれ推薦した岸野重春、片山久を加えた5人で話し合い、北浦、岸野、片山が「青年運動の指導機関たる非合法的秘密組織を組織し其組織をユースと呼ぶ事に協議決定した上、徳田球一、渡辺政之輔は退席」した。残った3人は、「ユースの組織其他詳細な事項に付協議決定」した。ユースの活動費は、ロシア大使館書記ヤンソンから毎月300円支給されていたという⁽⁴⁾。

もっとも、コミンテル文書日本共産党ファイルには別の記録もある。それらによると、青年ビューローは5月に設立され、6月5日に最初の会議を開いたとされる⁽⁵⁾。その2日前に記された「Yamamoto」の書簡によれば⁽⁶⁾、ユースの活動が「6 The Youth There is a youth organization connected with Etta. A monthly paper is published with a circulation of 3000 copies. We are planning to extend the youth organization in the industrial centres.」(6 ユース「エタ」と結びついた青年組織があり、発行部数3000に達する月刊誌を発行している。私たちは工業中心地にも青年組織を拡大するつもりだ。)と記され、とくに水平運動左派との関係を深めていた様子がうかがえる。

ビューローの7月会議で話しあわれた青年運動でも、青年ビューローによる労働運動と水平運動の青年層の取り込みについて言及されている。

III The Youth Movement

The following decisions of the Youth Bureau

were approved by the Party Bureau.

(a) The organization of a Young Worker's union (Seinen Rodosha Domei)

(b) A thesis on the necessity of the young worker's movement (which has already been distributed)

(c) "Seinen Rodosha" (Young Workers) to be published as organ of the Youth.

(d) The Suiheisha Youth organization to aim for national Youth Organization. its present organ "The Chosen People" to become The "Youth Masses".

青年ビューローの下記の決定は党ビューローによって承認された。(a) 青年労働者同盟の組織、(b) 青年労働者運動の必要性に関する論稿(すでに配布されてきた)(c) ユースの機関誌として『青年労働者』が発行されるべきこと、(d) 水平社青年同盟は全国的青年組織に向かうべきであり、それにともない現在の機関誌『選民』は『青年大衆』となること⁽⁷⁾。

おもに関東の労働組合の青年層への働きかけは片山久が、大阪を本拠とする全国水平社青年同盟への働きかけは大阪の岸野重春が担っていた。全国水平社の前衛部隊ともいべき全国水平社青年同盟は1923年11月に結成され、松田喜一が中央委員長、木村京太郎、中村福麿、岸野重春、高橋貞樹らが中央委員であった。ビューローから全国水平社青年同盟への影響は、岸野、高橋が中心となっていたと考えられる。この全国水平社青年同盟の機関誌は、『選民』1925年8月15日号をもって『青年大衆』に改題した。また、9月18日には、大会が開かれ、全国青年同盟結成の運動に参加すべく、全国水平社青年同盟を解体して、全国単一無産政党結成の組織準備に向けて、全国水平社無産青年同盟を結成する。こうした一連の流れが青年ビューローの影響下にあったことが考えられ

る。

これらの経緯から明らかなように、この時期のユース結成準備の主力は、労働組合と水平運動の青年層であった。これは9月7日付の「Yamato」からヴォイチンスキーに送られた書簡でも裏付けられる⁽⁸⁾。

The young Workers League is growing by leaps and bounds. It reaches 1500 membership mark. It is composed of the Etta Youth and the Trade Union Youth, it is an organization strongly imbued with Communist ideas but are far from it to be 100 % Communist League, which means in Japan to be an underground organization.

青年労働者同盟は急速に成長し、1500名にとどく勢いである。同盟は、「エタ」の青年と労働組合の青年からなる。この組織は、共産主義的思考に強く染まってはいるが、まったくの共産主義者同盟ではない、そうなれば日本では地下組織になってしまうからだ。

同じ書簡には、ユースおよび青年ビューローの体制について以下のように詳述されたことは興味深い。

The Youth have 12 underground members, who are occupying all leading positions of the Young Workers League / the leagal [legal] organizations /. The Bureau of the Youth is composed of 5members- 4 Youth and Mizutani. In November the Youth will held an Underground Conference. The Agenda for same is being drafted by Com.Kitaura. Also from that Conference on an Official Underground Organ will be started.

In January the Constituent Congress of the Young Workers League /legal/ will be held. — A lengthy [lengthy] Report in Japanese I am sending to the Secy of IKKIM.

ユースには12名の地下活動家がいる。彼らは青年労働者同盟／合法的組織／の指導的立場を独占している。青年ビューローはユース4人と水谷の計5名のメンバーで構成される。11月になれば、ユースは地下会議を開催する。議題は、同志北浦によって書かれている。この会議以降、公認地下組織が活動を開始する。1月には青年労働者同盟／合法／の構成者が参加して会議を開くだろう。長い邦文報告書が、共産主義青年インターナショナル執行委員会に送られるはずだ。

以上の記述から判断すれば、ビューローの下に青年ビューローが存在し、その下にユースが位置づけられた。また、青年ビューローにはビューローから水谷が、ユースから4名が集まって構成されたことがわかる。ユースの指導下に合法組織として「青年労働者同盟」(Seinen Rodosha Domei, The young Workers League は同一か)があったようだが、この団体が正確に何を指すかは現時点では明らかでない。この頃、ユース結成に向けて、無産青年同盟の準備が進んでいたことと関係があったと思われる(後述)。上記の英文報告には、学生運動との関係は記されていないが、青年ビューロー、もしくはユースからの影響は1925年8月頃からあらわれてくる。

4-2 京都における労学提携の動き

1925年8月頃には、京都の労働運動も新たな段階に入った。無産政党結成準備への取り組みがはじまったのである。このきっかけのひとつが、日本労働組合評議会機関誌『労働新聞』無産政党号(1925年8月8日発行)だった。同号は、徳田球一、渡辺政之輔、野坂参三、志賀義雄、佐野文夫、上田茂樹、青野季吉らがビューローの方針にそって執筆した。内容は、政党準備運動の内容と方向を示したものであり、約35000部が刷られて全国に送られたという⁽⁹⁾。

この提唱は京都にも大きな影響をあたえた。左派にあった京都の労働団体、思想団体が結集して、9月18日に京都地方無産団体協議会を設立した。以後、重要な問題はこの団体が活動の主体になったとされ、京都における無産青年運動の産婆役もつとめていく。

協議会の結成には、政治研究会代表として宮崎菊次(同志社)と淡徳三郎(京大)も参加した⁽¹⁰⁾。政治研究会京都支部もこの頃動きを活発化させており、9月に京都労働評議会事務所で会合を開いた。神田兵三が東京の政治研究会の会合に参加したときの状況を報告し、無産政党樹立対策の討議で政治研究会内が2派にわかれていたことを伝えた。

これと前後して、淡徳三郎方に政治研究会京都支部員約20名が集まって、政治研究会拡大委員会を開き、無産政党樹立に向けて活動することにした。活動部員は京大から石田英一郎、鈴木安蔵、鷲谷武二、黒田久太、熊谷孝雄、吉川孟文、同志社から姫野誠二、宮崎菊次、京都地方評議会から上村正夫、神田兵三、また杉野忠夫らであり、市電班、西陣班、花園班などの活動部班にわかれて、茶話会開催を通して労働者に無産政党組織の急務を訴えた⁽¹¹⁾。ビューローの左傾化活動を背景として、京都でも労働組合、政治研究会、学生の勢力が接近しつつあったことがわかる。

同じ傾向が、産業労働調査所の活動にもあらわれた。同団体は、総同盟支援のもと野坂参三を中心として1924年3月に労働問題の調査研究を目的として設立された。京都に影響がおよぶのはその翌年からである。1925年1月頃、同志社講師河野密が総同盟政治部顧問の山名義鶴から産業労働調査所の事業援助を依頼される。同年4月頃になり、京都支部設立の話がでたさい、河野は学生にも事業を手伝ってもらったほうがよいという意見を野坂参三に伝えた⁽¹²⁾。京都支部設立の5月から9月まで河野密が経営し、その後京大社研の藤井

米三に代わり、岩田義道も手伝っていた⁽¹³⁾。このあいだ、産業労働調査所もビューローの影響を受けていたと考えられ、「B〔ビューロー〕の事務報告」(同年3月31日付)⁽¹⁴⁾には「調査は一方産業労働調査所を通じてやると共に地下運動に対しては「報告者」(ニユクリア〔細胞〕の核をなすもの)によつて報告せしめてゐる」とある。

1925年9月27日、協調会館で産業労働調査所第1回総会が開かれた。ここで発表された以下の「事業報告」には運営において総同盟だけでなく、学連も大きな役割を果たしたことが記されている。

調査所と先づ、最も緊密な関係が結ばれたのは、日本労働総同盟であつて、調査所の実際的事業は殆んど総同盟のために行はれ、また総同盟も調査所に諸種の便宜を与へた。労働組合の外、学生連合会は積極的に援助を与へ、調査所の事業は是等の有志者の援助に俟つところ頗る大である。⁽¹⁵⁾

これは第1回総会の顔ぶれから裏付けられる。この日出席したのは、藤岡文六(鈴木文治代理)、岩田義道、猪俣津南雄、市川義雄、加藤勘十、上条愛一、小林輝次、衣谷賀真、三輪寿壮、野呂采太郎、野坂龍、鈴木茂三郎、田畑三四郎、平貞蔵、山口信二らである。このうち衣谷、野呂(1924年3月頃から関係)⁽¹⁶⁾、山口が学連関東連合会、岩田が京大社研に所属しており、学連代表として「清水」(平九郎か、関東連合会)の名がある。

総会全体を通して発言が目立つ岩田は、京都支所について以下の報告をおこなった。

京都支所——本部の報告にもあつた如く、本年〔1925〕五月頃野坂〔参三〕氏京都来訪を機として、京都に調査所の支所を設置することを決定した。／六月に入り産業労働調査所京都支所相談会を水谷〔長三郎〕氏宅で開き組合調査部員及学生連合会員が集つて調査の打合をした。八月に入り野坂氏の第二回来京

の時にも打合を開いた。九月十八日に第四回の会を開き、やはり各組合調査部、京都学連、河野〔密〕氏等が集つた。当日の決定事項の主なるものは、関西の支所の連合会を組織する事。大体大坂、神戸、京都が主となるべきであるから京都の主任を藤井〔米三〕氏にする事。／毎月第一土曜に必ず水谷氏宅に集り調査の打合をなす事。——失業調査組合調査の打合はせ。／九月廿四日に本部の総会に対する対策を決定し他の支所と打合はせをなした⁽¹⁷⁾。

京都学連事件の供述調書では、産労との関係はほとんど触れられていないが、京大社研のメンバーを中心に学連会員からの積極的な関与があつたことがわかる。

4-2 学連関東連合会の前衛化

学連のメンバーが大学外との連携を深めていくなか、より積極的だったのは関東連合会の方だった。こうした傾向は、教育テーゼ骨子と全国的教務案を確定していくなかで生じたものだった。

教育テーゼ骨子とは「一、階級闘争」「二、労働教育の意義」「三、ブルジョア教育と労働教育の構成」「四、マルクス主義的一元教育を必要とする社会的事情」「五、無産階級運動と学生運動」「六、学生運動に於ける教育の歴史」「七、学生運動の危険性と教育」「八、学生運動に於けるマルクス主義的一元教育の必要」「九 教育統一の爲めの事業」の各節からなる。五で、学生運動を無産階級運動の一翼と位置付け、「指導原理としてのマルキシズム、レーニニズム」をうたつたこと、八で「a. 学生運動の性質よりして一大衆的運動に非ずして無産階級運動に貢献し得る少数者獲得の運動」「b. 学生運動現在の思想的分野よりして一教育上に於ける共同戦線の反映に依つて生じた思想的統一の欠除種々なるデビエシヨン」を強調していることが重要である⁽¹⁸⁾。

全国的教程は冒頭に「従来研究会の多くではマルキシズムとレーニニズムとの歴史的関係に就て執つた非弁証法的見解か行はれて居た」ことが問題とされ、「帝國主義時代及び世界革命の時代に於ける理論は当然レーニニズム（註一）でなければならぬ」と規定される。その後も「レーニニズム」が強調されながら、これと並んで頻出するのが「中心分子」という言葉である。今後の研究会では、「中心分子」と「一般会員」に「画然」とわかつたねばならぬこと、しかも「中心分子と一般会員との思想的水準及能動的意思の程度が同一若くば同一に近い所の研究会は従来発展し得なかつた如く今後に於ては発展し得ないであらう」として、「中心分子」の運動への位置付けと心構えが説かれた⁽¹⁹⁾。

学連第2回全国大会後の8月下旬、清水九郎（明治学院）は、郷里の神戸で教育テーゼ骨子と全国的教程の原稿を作成した。清水は同月末、東京の村尾薩男（新人会）に原稿を送り、村尾は原稿を新人会本部に送った⁽²⁰⁾。

清水が帰京した9月10日の翌日に、新人会本部で関東連合会常任委員会が開かれた⁽²¹⁾。清水、村尾、後藤寿夫、秋笹政之輔、野呂栄太郎、実川清之らの参加のもと、関東総会の準備と二学期中の諸計画、関東総会に提出すべき議案がまとめられた。議事は、合同研究会のプラン、倍加運動の件、関東連合会組織一部改正の件、教育テーゼ骨子と全国的教程の件などである。清水が書いた教育テーゼ骨子と全国的教程案の原稿は、問題なくそのまま全国的教程と教育テーゼ骨子となった。常任委員会で可決された内容は、同月23日にマクドナルド教会空き地で開かれた代表委員会で可決された⁽²²⁾。

関東連合会総会が開かれたのは、同月26日である⁽²³⁾。慶應義塾大から会場提供を拒否されたため、急遽日本労働組合評議会関東地方評議会本部で開かれることになった。参加者は約100名で、

村尾を議長として以下の議事が話し合われた。「一、学連テーゼ再審議の件 二、学連全国規約の報告の件 三、教育テーゼ及教程の件 四、合同研究会の件 五、倍加運動の件 六、本部確立の件 七、関東連合会組織一部改正の件 八、S、M、A、後援の件 九、其他。」⁽²⁴⁾ 重要なのは教育テーゼ骨子と全国的教程の件であり、この大会で教育テーゼ骨子と全国的教程が関東連合会の承認を受けた。

これらの制定過程で「レーニニズム」と「中心分子」という言葉が関東連合会の方針に位置づけられる一方で、ユース結成準備の影響がこの頃学連関東連合会の一部におよびはじめた。ビューロー青年部の方針に沿って、東京、大阪では1925年8月頃までに全日本無産青年同盟の準備委員会が結成され（大阪は全国水平社青年同盟本部内）、神戸でもこうした動きに「学生連合会員」が参加していた⁽²⁵⁾。この準備委員会は、政治研究会第3回臨時大会（10月7日）に多数の青年代議員が集まっていることを利用して、翌8日に第1回全国協議会を開催し、東京はじめ全国から数十名が参加した。協議会では「学生連合会」に関する報告もあり、学連会員も参加していたと考えられる。ここで全日本無産青年同盟創立と全国的準備委員会の即刻成立を満場異議なく可決した。ただし、その構成まで即決できないため、各地にある準備委員会の協議によって作ることになった。この日の夜、全国的準備委員会の代表者若干名が集まり、「組織のプログラム、同盟の組織（規約）大綱〔、〕綱領、機関紙、会費等」を取りきめた⁽²⁶⁾。

最初に結成された地方準備会は、全日本無産青年同盟東京青年同盟である。11月1日の創立大会では、まず北浦千太郎が開会の宣言を、片山久が東京準備会の諸経過報告を、岸野重春が全国準備会の現勢説明をおこなっている⁽²⁷⁾。学連との関係では、この準備に東大、早稲田、青山学院などの学生が参加するなかで、北浦千太郎は新人会の門

屋博、是枝恭二、村尾薩男と知り合いになったと供述しており、是枝と村尾は同年8月中旬にユースに加入したとされる⁽²⁸⁾。

是枝を北浦に紹介したのは徳田であり、是枝と村尾の勧誘には徳田が関係している。徳田は志賀義雄(新人会出身)の推薦で、1925年9月中旬に村尾と是枝を自宅で勧誘して、彼らから承諾を得、村尾には九州でオルグ活動に従事すべきこと、是枝には無産者新聞社(佐野学主筆)で働くべきことを伝えた⁽²⁹⁾。是枝自身の供述では9月末から東京青年同盟の創立準備に関わり、創立大会で綱領朗読も依頼されたという⁽³⁰⁾。是枝以外に無産青年同盟に関わったのは新人会の松本篤一⁽³¹⁾、日本大学の実川清之⁽³²⁾、東京青年同盟に関わったのは早稲田高等学院の秋笹政之輔である⁽³³⁾。

10月頃には徳田、志賀、村尾、是枝が志賀方に集まり、徳田から学連内にフラクションを組織することが提議され、志賀、村尾、是枝が組織することに決定し、志賀がキャプテンとなった。彼ら学連フラクションの仕事として下記があげられている。

- (一) 学生連合会をコンミュニスト的に教化し、フラクションを中心として学生連合会の指導と統制とをする事
- (二) 反帝国主義運動、主として学生軍事教育反対運動に闘争を集中する事
- (三) 学生運動と無産青年運動を連絡せしむる事
- (四) 学生を労働組合の教育運動及無産政党組織運動へ進出せしむる事⁽³⁴⁾

こうした影響が新人会にも広がっていくのは時間の問題だった。是枝によると、この頃から新人会は「中心分子」たちの研究のために「特別合同研究会」を設けた⁽³⁵⁾。この会では時事問題に関して講師を招き、講義後討論をしていた。9月1日頃に下谷労働学院で佐野学から無産政党問題を、同月4、5日頃、同所で徳田球一から組合論の講

義を受けた。これ以外には、9月末か10月初め頃、東大第二学生控所で無産政党組織について政治研究会内で起こっている問題を題材として討論会を開き、10月末には同所で外国青年運動に関する討論会、11月中旬には同所で日本の青年運動に関する討論会を催した。

11月中旬になると、関東連合会の組織が変わっている⁽³⁶⁾。同月19日に開催された関東連合会代表委員会で、清水平九郎、後藤寿夫、実川清之、秋笹政之輔、長島又男、中村英一、小倉司郎、内垣安造、山口隼郎、山口信次、岡田宗司、高山洋吉、奥村帙之助ら約30名が組織改正について話し合った。既述のように、これまで関東連合会には最高議決機関である総会が設置されていた。総会は、毎学期1回常任委員によって招集され、各学校の会員すべてで構成される。しかし、この代表委員会で、総会を大衆的教育訓練親睦の機関とすること、かわりに各校研究会から2名選出された代表委員会を最高議決機関(従来は総会から次期総会までの議決機関)として隔週開くこと、この代表委員会の監視機関である「プレディジュウム」を設けることが決まった。この組織のメンバーは是枝恭二、実川清之、松本篤一である。組織における「中心分子」の重視が新人会のみならず関東連合会にもおよびはじめたといえよう。

こうした傾向は、京大社研にも見られないわけではない。9月13日に開かれた京大社研の委員会で研究方針をめぐる激論が交わされている⁽³⁷⁾。これは、学連第2回全国大会(1925年7月16日)に出た者と出なかった者との間に生じた対立であった。

この委員会で、大会に出席した石田英一郎は資本論研究の中止を提案した。理由は、資本論研究などは術学的であり、マルクスよりもレーニンを研究しなければならないというものである。彼はスターリンの「レーニズムの理論と実際」を称揚した。石田はすでに一高時代(1922年)に「天

皇は国家の機関であって神様ではない人としては
 変りありま〔せ〕ん。然るに 皇室か絶対無上の
 神様であるかの様に考へ現在の小学校や又一部の
 人は皇室を崇拜して居るがそれ程に盲目的崇拜
 をすへきものではない」として「反逆者としての
 自分」を見出しており、さらに7月下旬に訪れた
 中国で、鈴江言一の紹介で会った「北京国立大
 学生黄布山」と反帝国主義のための日中学生運
 動の共闘を約束するなど、他の学生とくらべ意
 識のちがいは鮮明だった⁽³⁸⁾。

しかし、大会に出席しなかった岩田らからは資
 本論研究を続けるべきだという意見が出された。
 この頃から、1925年度河上肇担当の講義「経済
 原論」に社研の学生が出てこなくなったという回
 想があるが、上記のような方針をめぐる対立が
 社研の内部であったと思われる⁽³⁹⁾。

また、26日にはいわゆる「レプセ事件」が起
 きた。これは同年9月、ロシア金属労働組合執
 行委員長レプセが来日したさいに、京大社研の
 メンバー数名が西下するレプセに手紙を手交し
 ようとして、結果的に鈴木安蔵が当局に検束さ
 れた事件である。この検束後、京大社研は緊急
 委員会を開催し、本部事務所に備え付けの会
 員名簿や手紙などを焼却し、また翌月6日に露
 国労働代表送迎者検束問題批判演説会を開き、
 約200名を集めた⁽⁴⁰⁾。この事件は、京大社
 研が組織的に動いたわけではなかったが、京
 大社研が当局の注意を引くには十分すぎるイ
 ンパクトがあった。

しかし、ともに左傾化の影響を受けながらも、
 京大社研には関東連合会と異なる側面もあっ
 たことを指摘しなければならない。それは、9
 月25日から10月上旬まで上京した岩田が言
 われた一言に凝縮されている。岩田が上京し
 たのは、友人で東大経済学部助教授の山田盛
 太郎を訪ね、卒業後の進路を相談するためだ
 った⁽⁴¹⁾。その一方で、岩田は、新人会の後
 藤寿夫を訪ねたあと、新人会、関東連合会、
 政治研究会、産業労働調査所の各会

合に出席した。興味深いのは、関東連合会の
 会合で、岩田が関東の研究会では会員全体で
 なく少数者だけが動いていると批判すると、
 関東連合会のメンバーから、京都はあまりに
 「デモクラティック」でいけないと逆批判さ
 れたことである。しかし、この京大社研も次
 章で触れるプロカルチャー、班生活テーゼが
 制定され、また京都無産者教育協会が設立
 されるなかで、関東連合会と同じ道をたど
 っていく。

5 労働者教育に向けて

5-1 「教化」としてのプロカルチャー

京大社研がこの時期熱心に取りくんだのが
 プロカル活動であった。プロカルとは「プロ
 レットカルト」を縮めた言葉で、1921年発
 行のポール夫妻(Paul, Eden & Cedar)の
 “Proletcult (proletarian culture)”,
 Leonard Parsons, 1921から普及したも
 のである。

京大社研にとって、プロカル運動とは「
 抽象的智識の供給ではない。資本家的教化の
 排撃—無産階級の歴史的任務の自覚—階級
 闘争の指針としての理論の獲得」であつた⁽⁴²⁾。
 彼らのいう「カルト」は文化よりも「教化」
 の意味が強く、労働者文化の育成よりも「
 理論」の獲得が重視されたことがわかる。

すでに1925年3月頃から、淡徳三郎ら
 が京都労働学校で教えるなど個人的な活動
 として始まっていたが、4月か5月頃から
 プロカル部として活動することになり、岩
 田義道、逸見重雄、大橋積、淡徳三郎、
 藤井米三、鈴木安蔵、橋本省三、山崎
 雄次、鷺谷武二、熊谷孝雄、泉隆、古賀
 二男、石田英一郎らが委員に選ばれ、京
 都労働学校などに派遣されていく⁽⁴³⁾。

こうしたなか、同年8月京都労働学校
 改革の動きが起こっている⁽⁴⁴⁾。同月25
 日、事業内容の改善をめざす京都労働学
 校から京大社研に意見を聞きたいという
 通知が来る。同月29日晚、上記会

合に出席するため、淡と石田が京都地方評議会本部を訪ねた。この日は、評議会から谷口善太郎、国領五一郎が、京都労働学校から山本宣治、林要らが参加した。谷口の話では、京都労働学校が京都地方評議会の専属機関であるかのように考えられ、同会所属の労働者でなければ入学できないかのように思われて迷惑なので、学校を運営する団体を新しく作りたいということであった。幅広い無産者教育機関の設置、教育機関は会員組織とすること、会費は1か月20銭とし有志者からも寄付を募集することなどが決まった。

一方、京大社研も9月13日頃、北白川本部で開催された委員会で、プロカル部を廃止して、プロカル事業を委員会の仕事にすることを決めた。翌月、京大、同志社など京都にある研究会合同(「京都学連」と称された)の社会部を設けて、プロカルをおこなうなどこの事業は他組織にも波及していく⁽⁴⁵⁾。

9月20日開催の京大社研の委員会でもプロカルについて話し合われた⁽⁴⁶⁾。この日、山崎はプロカルテーゼの構成をめぐる栗原佑と議論する一幕があり、座長淡徳三郎は起草委員に作成を一任することで收拾をはかった。委員は鈴木安蔵、鷲谷武二、山崎、岩田義道である。しかし、彼らは会合する機会を持たず、結局山崎一人がテーゼ・教程案を作成する。山崎は、ポール夫妻のプロカル論、『マルクス主義』および大原社会問題研究所で閲覧した“International press correspondence”誌掲載のプロカル関係記事から得た知識にもとづいてプロカルテーゼと教程案を作成したという。山崎が橋本省三に教程案原稿を渡したのは同月27、8日頃である⁽⁴⁷⁾。

10月3日、「レプセ事件」のために延期されていた学連関西連合会委員会が大阪市原田耕方で開催された⁽⁴⁸⁾。出席者は、鈴木安蔵、栗原佑、橋本省三、永井哲二(以上京大)、沢田政雄(同志社)、黒川健三、原田耕(以上大阪外語)、蓮台恒治(神

戸高商)、小崎正潔(関西学院)ら約20名である。黒川を議長として、関西連合会組織改造の件、次期大会開催の件、大会直前直後における講演会開催の件が提出され、いずれも可決された。

この組織改正によって、関西連合会は組織部、教育部、社会部、会計部を設けて、同志社京大共同のプロカル活動事務をこの社会部で統括することに決まった。作成したプロカルテーゼ・教程案は同月10日までに関西委員に送付し、17日の関西委員会で討議すべきことを決議する。それ以外には、関西連合会教育テーゼ作成の件が希望案として提出されたほか、全国的な無産青年同盟成立への態度を定める件、日和見主義者への態度決定の件、政治研究会への対策決定の件が討議された。

この委員会を受けて、翌10月4日、北白川本部で京大社研の委員会が開かれた⁽⁴⁹⁾。おもな議題は、研究コースの設定とプロカルテーゼと教程である。班組織は、普通研究班と特別研究会をもうけ、普通研究班は地域によって会員を5つの班にわけ(北白川班、聖護院班、下鴨班、岡崎班、寄宿舎班)、週1回研究コースにもとづいて研究を進めることにした。

特別研究会は、資本論研究会、時事問題研究会、農村問題研究会であり、週1回会合する。研究コースは、「第一回 Leninism 諸問題解決のキイとしての弁証法」「第二回 資本主義社会の発生、特徴、矛盾」「第三回 帝国主義」「第四回 資本主義の没落(一)」「第五回 資本主義の没落(二)」「第六回 インターナショナルの研究」「第七回 政党、組合、戦術」「第八回 日本無産階級の陣営」が設定されている⁽⁵⁰⁾。

この日の委員会では、山崎が作成したプロカルテーゼ・教程案が話し合われた。しかし、出席者から意見が出てあらためる必要が生じたため、山崎は10日頃にテーゼ・教程を書きなおし、橋本に渡した⁽⁵¹⁾。テーゼ前半を永井哲二が、後半を橋本が謄写版の原紙に書いて、橋本が3、40部印刷

し、間近にせまった関西連合会委員会に向けて、原田耕（大阪外語）や小崎正潔（関西学院）ら委員に発送した。

同月17日、関西連合会委員会が京大社研北白川本部で開かれた⁽⁵²⁾。出席者は、石田英一郎、橋本省三、鈴木安蔵（以上京大）、大浦梅夫（同志社）、原田耕、黒川健三（以上大阪外国）、蓮台恒治（神戸高商）、小崎正潔（関西学院）らであった。橋本省三を議長に選んで、関西連合会教育テーゼ作成の件、プロカルテーゼ・教程に関する件などが話し合われた。関西連合会教育テーゼは未完成のため保留となった。プロカルテーゼ・教程は鈴木安蔵が用意した印刷物にもとづいて説明し、テーゼは大きな問題なく可決されたが、教程はテキストの選定に意見が出て修正されることになった。

同月18日、京都学連社会部第1回委員会が京大社研北白川本部で開催される⁽⁵³⁾。ここで議論されたのはプロカルテーゼ・教程であった。参加者は、鈴木安蔵、橋本省三、池田隆、白谷忠三、熊谷孝雄、黒田久太、石田英一郎、岩田義道、古賀二男、鷺谷武二、藤井米三、沢田政雄、宮崎菊次、大浦梅夫、上村正夫、淡徳三郎らである。まず淡と岩田から政治研究会第3回臨時全国大会に出席したことが簡単に述べられ（後述）、橋本から無産青年運動の件、鈴木からプロカル運動の現勢、藤井から産業労働調査所に関する件が報告された。鈴木が説明したプロカルテーゼは意見の一致を見たが、教程の方は意見が割れた。

鈴木はこれ以前に、同志社の宮崎菊次から、京都で作成したプロカルテーゼは東京方面では評判がよくないことを聞かされていた⁽⁵⁴⁾。それゆえ、鈴木はこの場で、東京では、未組織労働者には煽動、組織労働者には宣伝、前衛分子には戦術といった三段階に区別してプロカル教程を作成しているなどと説明した。しかし、京都地方評議会から参加していた上村正夫が、この教程は大学の講壇

式であり、日々の実際問題をかかげながら労働者を教育するのが正当だという批判を展開した。

上村からの指摘もふくんだプロカルテーゼは「現在吾々は何故プロレットカルト運動に干するテーゼを必要とするか」「ブルジョア階級文化の帝国主義化」「プロレタリアート運動とプロレットカルト運動」「日本に於ける現在のプロレットカルト運動の批判」「闘争的教育の強調」の各章から構成された。重要なのは最後であり、プロカル運動における彼らの以下のような方針がつけられている。

以上の批判によりて吾々の方針は必然的に次の如くである

a. カルトの原則——マルキシズム、レーニニズム。

資本主義の発展と労働階級の戦術とをその全体性に於て発展的にカルトすることを目的とする殊に帝国主義の本質並にその時代の無産階級の戦術を主眼点とすべきである

イ. 闘士の訓練

ロ. 反帝国主義

ハ. 日和見主義の排撃

ニ. 都市労働者と農民との共同戦線

b. カルトの方法

プロレットカルトは決して講壇からの喋々によつて達せられたるものではない大衆の日常生活の中から彼等の切実な問題に付て談論し彼等の階級意識を鮮明ならしめ以て同時に実行に結びつけなければならぬ。故に大体次の如き方法を原則とすべきである

イ. 大衆の相談相手となり討論の相手となり真の同僚なること。此の為には用語、服装、態度等些細な点に迄留意せねばならぬ此この權威的、官僚的態度を以てするならば失敗する

ロ. Discussion — method — 講師が只全時間を演説するは不可である〔。〕カルトの大体の骨組及肝要な点を先ず述べてなるべく多くの時間を質問討論に割き出来得るならば全部の人員をして意見を述べしめその中から大衆の意識をアウフヘーベン、して行くべきである

ハ. 無産者の日常確実の問題を結びつくこと。日々起つて来る種々の経済的政治的問題並に無産階級の当面の問題(其地方某組合特殊の問題、政党の問題等)を講義討論を結びつくことが肝要である

ニ. 全出席者の平均的レベルを標準とすること

出席者の中の少数者を標準とすることは失敗に陥る。

併し若し出来得べくんば出席者を思想程度に従つて別つことが最良の方法である⁽⁵⁵⁾。

東京式のプロカル段階説は、bの二で努力義務として入っている。また、上村の意見がbの冒頭に反映されたと思われる。このプロカルテーゼの眼目は、「教化」にあたって「レーニニズム」を原則としたことであり、教程にレーニンおよびスターリンの文献をあげたことである。大衆と「真の同僚」になることをめざしながら、「大衆の意識をアウフヘーベンして行くべき」と述べる彼らの意識の内にこそ、「権威的、官僚的態度」がすべり込んでいく余地はなかったとはいえない。しかし、その一方で、上村による「講壇式」自省の指摘や、栗原佑の後年の回想にある「労働学校というのは教えるのではなくて、求道、つまりそこで労働者から学ぶ」⁽⁵⁶⁾可能性もあったのである。

5-2 「真の無産階級の教育」と班生活テーゼ

こうしたなか、京都では、労働者側からも労働者教育への働きかけがおこなわれようとしていた。1925年10月上旬、京都地方評議会の上村正

夫は、統一ある統制のもとにプロカル運動をしようと考え、評議会幹部の辻井民之助、谷口善太郎に独立の教育機関を設置することを相談し、賛成を得る⁽⁵⁷⁾。これを受け、上村は、同月中旬頃、京都地方無産団体協議会代表委員会で、無産者教育を目的とした独立の教育機関を設けたらどうかと提案し、反対意見もなかったため、近日中に創立相談会を開くことが決まった。ここには、京大社研の淡徳三郎も参加しており、淡が教育機関の規約草案を作ることになった⁽⁵⁸⁾。

福岡県出身の上村は、1921年4月三高理科甲類一組に入ったものの⁽⁵⁹⁾、同年11月「家事都合に依り」⁽⁶⁰⁾休学、帰郷中に英訳資本論を読むなど早熟ぶりを発揮している⁽⁶¹⁾。三高では2年先輩の文科に杉野忠夫、服部之總、中井正一、淡徳三郎、大宅正一、大岩誠、浅野晃らが、同組には今西錦司がいた⁽⁶²⁾。翌年4月に京都へ戻った上村は、学校に行かず下宿でマルクス主義文献を読みふけり、同年夏頃2、3人のグループで社会思想研究をはじめた。1922年11月頃、このグループを拡大して三高内に社会問題研究会を立ち上げるが⁽⁶³⁾、当局から問題とされたため、1923年3月に学校から除名された⁽⁶⁴⁾。

同年5、6月頃より、上村は、弘文堂印刷工場で印刷工としてつとめはじめ、日本労働総同盟京都連合会に入会する。このころ、上村は伍民会(のち京大社研に改称)に参加したが、会の活動には深く関与せず、12月初め入営した⁽⁶⁵⁾。除隊後の上村正夫は1925年5月京都地方評議会に入会し、ここで岩田義道や淡徳三郎ら京大社研のメンバーと親しくなったという⁽⁶⁶⁾。上村はプロカル運動の影の立役者であるだけでなく、後述する京都無産者教育協会の産婆役をつとめる。

10月21日、京都地方評議会事務所で無産者教育機関創立に関する相談会が開かれた⁽⁶⁷⁾。学生側からは淡徳三郎、岩田義道、泉隆、鷺谷武二、白谷忠三、池田隆(以上京大)、宮崎菊次、内海洋

一（以上同志社）が、評議会側からは辻井民之助、神田兵三、半谷玉三、上村正夫らが参加した。議長には上村が推された。まず淡が協会設立の経過を述べて、準備してきた規約草案を説明するはずだったが、訂正箇所があったため、訂正した草案の方を読み上げた。しかし、あらためるべき箇所があるため、規約草案準備委員を選ぶことになり、宮崎、岩田、泉、上村、神田、淡が選ばれた。

同月23日に準備委員会が淡方で開かれ、淡徳三郎、岩田義道、泉隆、宮崎菊次、上村正夫が参加する⁽⁶⁸⁾。ここで規約草案を作成し、創立大会で選定する委員について話し合った。各部の委員は委員長上村、都市プロカル部長岩田義道、農村プロカル部長泉、財政部長淡、図書部長大浦梅夫が決まる。また、無産者教育機関ができれば、社会部のプロカル事業と重なるため、社会部廃止を検討することになり、数日後廃止が決定する。また、上村の意見で、今後地方評議会の維持費として受けている寄付金を教育機関の労働学校の管理費にあてることを提案し、出席者から賛同をえた。

京都無産者教育協会の創立大会が開かれたのは11月1日である⁽⁶⁹⁾。この日、大会会場の京都地方評議会事務所に集まったのは、学生側より淡、岩田義道、泉隆、武藤丸楠、鷺谷武二、池田隆、古賀二男（以上京大）、宮崎菊次、内海洋一、大浦梅夫、沢田政雄（以上同志社）らと、評議会を中心とした組合側より辻井民之助、国領五一郎、奥村甚之助、半谷玉三、上村正夫らであった。議長には上村が選ばれた。協会の役員が推薦され、準備委員会で決められたとおり、委員長上村正夫、都市プロカル部長岩田義道、農村プロカル部長泉隆、図書部長大浦梅夫、財政部長淡徳三郎になる。

淡から、作成された規約草案の審議が提案され、内容が説明されたあと、以下の規約が確定した。「名称（第一条）本会は京都無産者教育協会と称す、目的（第二条）京都市及其付近の無産階級に真の無産階級的教育を普及す 構成（第三条）積

極的に無産階級教育に参加せんとするものにして本会が入会を許容したる者を以て構成す、会員の義務（第四条）会員は本会の綱領、規約並に決議を厳守し上層機関の統制に服し何れかの活動部門に分属する義務を有す」などである。

このなかの「真の無産階級的教育」という箇所が重要である。そもそも上村にとって、これは「マルキシズムの一元的教育を指導精神とする教育」にほかならなかつたが、「評議会及び組合の教育部の人達」に対して「明かにマルキシズムを指導精神とする教育と云へば反対する者もあるであらうと思ふた」ので、「単に無産者を教育する機関」と述べて説得していた。そして、「真の」という言葉を規約にすべり込ませた上村は、「淡徳三郎、岩田義道、泉隆、私等の如き所謂中心分子はマルキシズムを指導精神とする教育を施す為めに」協会を創立したとされ、「創立総会及び其以前の創立に関する相談会に於ても真の無産階級的教育なる文字の意義に関して質問をした者も無ければ又之を説明した者も無かつた」のであつた⁽⁷⁰⁾。

1週間もたたない11月7日、関西連合会第4回大会が関西学院講堂で開催された⁽⁷¹⁾。神戸大阪側からは原田耕、黒川健三（以上大阪外語）、小崎正潔（関西学院）、蓮台恒治（神戸高商）、京都側からは橋本省三、山崎雄次、池田隆、栗原佑、岩田義道、岡本忠文、鈴木安蔵、永井哲二、鷺谷武二、大橋積、白谷忠三、黒田久太（以上京大）、内海洋一、宮崎菊次、沢田政雄（以上同志社）ら3、40人が出席した。池田が議長、岡本が書記となって、大会は進行する。

関西連合会などの情勢報告に続いて、議事に入った。まず話し合われたのは組織改造の件である。これまで関西連合会の組織は中央委員、教育部、社会部、組織部、会計部の総数15名から構成されていたので、これを9名に減じることにした。このとき、中央委員に橋本、組織部委員に大田、会計部委員に永井、教育部委員に石田が推薦された。

教育テーゼ作成の件は岩田が説明し、各教育部に作成を一任して異議なく可決。これ以外には、臨時会費徴収の件、三高進化会に解散を命じた三高当局に対し抗議文を提出すること⁽⁷²⁾、小樽高商軍事教育演習で「無政府主義者」「不逞鮮人」が仮想敵とされたことへの対策などが議事項目にあがった⁽⁷³⁾。また緊急動議として、早稲田雄弁会に対し激励電文送付の件、関西連合会本部設置の件が提出されたほか、校内運動の件やサラリーマン同盟後援の件も説明された。

しかし、本当に重要なことが話し合われたのは、翌日の「継続会」だった⁽⁷⁴⁾。午前中から関西学院付近の成宮音次郎方で非公開の会合が開催された。参加者は前日の約半分で、原田耕、黒川健三(以上大阪外語)、小崎正潔(関西学院)、内海洋一、宮崎菊次(以上同志社)、橋本省三、池田隆、栗原佑、岩田義道、大橋積、永井哲二、黒田久太(以上京大)ら20名あまりであった。

出席者には、班生活テーゼ、全国的教育テーゼ骨子、全国的教育のプリントが配布された。前日の大会では、全国的教育テーゼ骨子、全国的教育は、各教育部が作成することになっていたが、これは表向きのものだった。このうち、全国的教育テーゼ骨子、全国的教育の印刷物は、学連関東連合会から届けられたものであったという。前日議長をつとめた京大社研の池田隆は、「併し其翌日の会合に於てはさきに関東学連で作成したといふ別個の教育テーゼか其儘上程可決せられたので其間に何等かの経緯かあつたと思ひますか私は其当時之を聞き少しの疑念も差挟まず又其作成経過に付ては何も聞いて居なかつたのであります」⁽⁷⁵⁾と述べている。

教育テーゼ骨子では、学生運動は無産階級運動の一翼と位置付けられ、「指導原理としてのマルキシズム、レーニズム」のもと、「学生運動の性質よりして一大衆的運動に非ずして無産階級運動に貢献し得る少数者獲得の運動」を押し進めるこ

とが説かれていた。しかも、全国的教育では「レーニニズム」が強調され、「中心分子」の運動への位置付けと心構えが記されていた。

この日、全国的教育テーゼ・全国的教育案を岩田義道が説明し、座長格の石田英一郎が質問に答えたが、作成者や作成過程に関する詳細な説明もないまま、問題も提起されずに、そのまま可決されたという。

この教育テーゼ骨子の導入とならんで、もうひとつ注目すべきは、班生活テーゼ案の制定である。班生活テーゼ案が発案されるきっかけは、10月7日に東京の協定会館で開催された政治研究会第3回臨時大会である⁽⁷⁶⁾。この大会には、新人会のは枝恭二、京大社研の淡徳三郎と岩田義道、同志社社研の宮崎菊次、内海洋一が参加した⁽⁷⁷⁾。

宮崎は、この政治研究会の大会で、政治組織に関する原案が提出され、政党組織の基礎単位を班組織とすることを決定したのを見る。そして、同志社社研でもこれと同様の方法を取ればよいと考えた。帰京した宮崎は、10月末頃に開催された同志社社研総会で班生活テーゼ案作成を提案し、出席者から同意を得た⁽⁷⁸⁾。彼らは、班生活テーゼ案を関西連合会大会に提出することに決め、起草委員を選出した。

この班生活テーゼ案は、全会員が「自己生活の階級的自省批判の機関」である班を単位として集中的統一組織を確立することをめざしたものであった。また、無産階級運動の一翼として任務を全うするために、なによりも「無産階級の階級戦に於ける組織原則に従つて陣容を立て直す必要がある」として「(一) 集中的統一的に全会員が強固に結束され(二) 上層機関の統制と会員の意思の反映が有機的に行はれ(三) 全会員に対して階級戦に於ける一兵卒としての訓練が徹底的に与へられねはならぬ、其方法こそは班組織の確立を除いては他に絶対にあり得ない」ことがつづられていた。

また、研究会の目的達成のために下記のことをおこなうとされた。

- 一、班員は委員の統制に従つて研究会及連合会の活動に参加し其仕事を分担すること
- 二、既に結集されたるレーニニスム理論の体系的な研究
- 三、一般社会現象時事問題等の批判的研究
- 四、無産階級の陣営の情勢研究と其批判
- 五、社会科学運動及其校内運動の戦術研究と自己批判
- 六、班生活の自己批判と班員各個人上の事件生活の互助的批判⁽⁷⁹⁾

既述の如く、すでに関西でも班組織は採用されていたが、その位置付けと班の内容を大きく変えるものであった。とくに「階級戦」との関係、「上層機関の統制」や「自己批判」らの強調など「レーニニスム」の研究および習得を班組織でおこなうことが決められた。この内容を警官が監視する大会で提出することはできなかったため、翌日の継続会で上程され、賛成意見を受けて班生活テーゼが可決された。

こうした「前衛化」の影響は、京大社研の対外活動にもあらわれた。彼らは京都無産者教育協会が創立された11月1日から3日まで「無産者大学」を主催した。その講師と題目には櫛田民蔵「労働組合法案」、森戸辰男「政治と無産階級」に加えて、徳田球一「無産政党問題」も列記された⁽⁸⁰⁾。また、同月9日、つまり「継続会」の翌日に、大阪天王寺公会堂で関西連合会主催の講演会を開催し、橋本省三が山川均の「右翼小児病」の原稿を代読、また高橋貞樹や三田村四郎も演説した⁽⁸¹⁾。同月中旬には、学友会講演部主催「進化論講座第2部 社会進化論」が開かれ、ここに福本和夫が招かれた。福本を実質的に招いたのは京大社研だった⁽⁸²⁾。

また、京都でも10月に無産青年同盟の準備会が生まれた。同盟の機関紙『青年大衆』は京都の動きを以下のように伝えた。「京都では震災前少数の青年前衛分子によつて、青年運動が提唱さ

れたが、一度大会を開いたきりで潰れた。最近各地に運動が起ると共に、青年組合員の会合を催して、青年の糾合を初めた。近く 評議会の三組合、煙草労働、陶磁器工組合〔、〕学生、雑分子青年及び農民組合を中心にして 準備委員会を作るべく、直ちに百名以上を集め得る見込⁽⁸³⁾。この「大会」とは、本稿第1章でもふれた全国無産者青年大会（1923年5月17日）のことであろう。1925年10月14日には、第1回無産青年同盟準備委員会が開かれ、委員の選考や運動方針が協議された。20日の第2回委員会をへて、1926年1月、無産青年同盟京都地方準備会を正式に結成した。この準備会の運動は、朝田善之助、沖田留吉、早川忠孝によって主導され、京大、同志社両社研の学生や労働組合の青年がおもなメンバーであったという⁽⁸⁷⁾。

おわりに

政治運動とは一線を画していた関西の社研メンバーだったが、官憲の目にはそうは映っていなかった。11月以前、同志社社研の宮崎菊次が同大講師の河野密に班生活テーゼ案を伝えたさい、河野は当局が同大社研を実際運動団体と睨んでいると注意する⁽⁸⁵⁾。

11月15日、同志社内では朝鮮自由労働団体らの反軍教宣伝ビラを張り付けた者を内偵していた当局は、大浦梅夫（同大社研）を取り調べて家宅捜査をおこなったところ、「無産階級の独裁」「全国的教程」「プロレットカルトに関するテーゼ」など「不穩印刷物」を発見する。当局は、これをもって、京大社研と同大社研が「共産主義系労働団体」に対して「指導的立場」を発揮し、「不穩計画を画策せる疑充分なりし」という理由で、12月1日京大・同大社研メンバーを中心に37名を検束した。

京大・同大社研のメンバーは、12月3日付で声明書「家宅捜索、検束問題に就て全学学生諸君に

伝ふ」を公表して、事件後中止されていた研究会活動の再開を表明し⁽⁸⁶⁾、その後も演説会や大会を開催して、当局の非や研究の自由、大学の自治を訴えた。同月24日、京大法学部長佐々木惣一が、田村徳治、宮本英雄、滝川幸辰、末川博法学部教授立会のもとに「意見書」を公表、また同日、京大経済学部教授の神戸正雄、財部静治、河上肇、河田嗣郎、本庄栄治郎、小島昌太郎も「意見書」を公表し、研究の自由の保障を訴えた。

京大社研のメンバーは当局を公開で批判しながら、今後の対策も協議した。彼らが教示を仰いだのは、弁護士の水谷長三郎だった。7日に調査部を設置すると、部長の石田は押収物件、警察署での訊問事項、答弁の模様、始末書の内容、家宅捜査における警察の手続きに関する書類を取りまとめ、10日に水谷の事務所を訪ねた⁽⁸⁷⁾。同月20日にも、彼らは水谷を関西学連合宿所(今出川寺町)に招いて助言を仰いだところ、水谷はプロカルテゼを見て、この証拠書類は不利益であり、東京の共産党事件でもこれほどの証拠書類はなかったと思う、検事の outf によっては治安維持法で問われるだろうと述べた。このため、彼らは話し合っ、プロカルテゼ・教程を「協議」ではなく、「討議」したことにした⁽⁸⁸⁾。

しかし、水谷の予想は現実となる。当局は、12月下旬には、検挙への準備を水面下で進めていた。1926年1月15日から、京都における学連メンバーの検挙が一斉に開始され、4月下旬までにその数は38名にのぼった。彼らに「予審終結決定」が下されたのは同年9月である。そこには、被告人38人全員について治安維持法違反(第2条協議罪)、8名について出版法違反、1名(石田英一郎)について不敬罪違反の嫌疑を認定し、公判に付すべしと記されていた⁽⁸⁹⁾。

[註]

- (1) РГАСПИ, f.495/op. 127/d. 112/29-30.
- (2) РГАСПИ, 495/127/112/31-32.
- (3) РГАСПИ, 495/120/112/115-117. 文末に手書きで「Hanada」とある。
- (4) 「北浦千太郎予審訊問調書」453、461頁、山辺健太郎編『現代史資料20 社会主義運動7』1968年6月、みすず書房。読みやすさを考慮しカタ假名を平仮名にあらためた(以下同)。
- (5) РГАСПИ, 495/127/112/31-32.
- (6) РГАСПИ, 495/127/112/22-26.
- (7) РГАСПИ, 495/127/112/29-30.
- (8) РГАСПИ, 495/127/112/111-112.
- (9) 「徳田球一予審訊問調書」118、9頁、前掲『現代史資料20 社会主義運動7』。
- (10) 「淡徳三郎聴取書 第二回」『京都学連事件記録6』(以下記録)。
- (11) 「宮崎菊次第六回訊問調書」『記録12』。しかし、この会では、労働者に集まってもらい無産政党组织の急務をとくが計画は立派なだけで実際においては有耶無耶に終わったという。
- (12) 「河野密証人訊問調書」『記録19』。
- (13) 「岩田義道第六回訊問調書」『記録16』。
- (14) РГАСПИ, 495/127/124/38-45.
- (15) 「事業報告 自大正十三年三月至大正十四年九月」6頁『産業労働時報』1925年10月22日、産業労働調査所。法政大学大原社会問題研究所(以下大原社研)から1986年2月に復刻されたものを用いた。
- (16) 「野呂栄太郎聴取書 第二回」『記録12』。
- (17) 「産業労働調査所第一回総会開かる」2頁『産業労働時報』1925年10月22日、産業労働調査所。
- (18) 「日本学生社会科学連合会教育テーゼ骨子」『京都学生事件報告書』。この報告書は1925年12月6日付で京都府知事池田宏から「学生ノ出版法違反事件ニ関スル件」の題で内務大臣若槻礼次郎、司法大臣江木翼、文部大臣岡田良平、京都地方裁判所検事正に向けて報告された。この時点で「社会科学研究会の現状は其の掲ぐる目的の如く単なる社会科学研究団体にあらずしてマルキシズム乃至

- レーニニズムの旗幟の下に結合せる実行的思想団体たること明瞭なるものと認めらる」(7丁)と記されている。
- (19) 「全国的教程」前掲『京都学生事件報告書』。
- (20) 「村尾薩男聴取書 第三回」『記録10』。
- (21) 「是枝恭二第六回訊問調書」「清水平九郎第七回訊問調書」『記録17』。
- (22) 「松本篤一第三回訊問調書」「実川清之第三回訊問調書」『記録18』。
- (23) 「愈々暴圧加はる 学生社会科学運動 意気軒昂の関東学連総会」4頁『無産者新聞』1925年10月15日、無産者新聞社。大原社研から1975年9月に復刻されたものを用いた。「後藤寿夫聴取書 第三回」『記録11』、「是枝恭二第六回訊問調書」『記録17』、「村尾薩男第五回訊問調書」『記録18』。この日の大会には京大から石田英一郎が参加していた。また、彼はこの数日後に東大学生集会所で開かれた新人会の討論会にも参加している。会は「政治研究会内の討論」をテーマとするもので、無産政党問題について討論したという。またこの大会には進め社の谷口直平が訪れた(「衣谷賀真聴取書 第三回」「衣谷賀真聴取書 第四回」『記録16』、「衣谷賀真第八回訊問調書」『記録18』)。ビューローの事実上の機関誌『進め』(1923年2月創刊)も、この時期になると福田狂二の支配下にあり、大庭柯公抹殺事件追及の運動がおこなわれ、ビューローと対立するようになっていた。谷口は、消息を絶った大庭柯公の事情説明についてロシアと交渉することを関東連合会委員に呼びかけたという。
- (24) 「第六回関東連合会総会」4頁『学生社会科学連合会会報』1925年10月20日、学生社会科学連合会、大原社研所蔵。ここには27日開催とある。
- (25) 「各地に挙る青年運動の烽火！ 無産青年の組織から組織へ！ 青年同盟準備委員会の創立」2頁『青年大衆』1925年8月15日、選民社。
- (26) 「青年同盟の全国委員会成立す!! 青年同盟組織の具体化 創立の日近し！ 結成を急げ！」2頁『青年大衆』1925年10月15日、選民社。
- (27) 「全国的組織の第一歩 東京青年同盟生る 一糸乱れぬ訓練のもとに！ 無産青年大衆団結せよ！」1頁『青年大衆』1925年11月15日、青年大衆社。
- (28) 前掲「北浦千太郎予審訊問調書」456、7頁。
- (29) 前掲「徳田球一予審訊問調書」172頁。「徳田球一外三十六名治安維持法違反被告事件予審終結決定書」135、169頁『現代史資料16 社会主義運動3』1965年10月、みすず書房。「是枝恭二聴取書 第一回」『記録5』。
- (30) 「是枝恭二第八回訊問調書」『記録19』。
- (31) 「松本篤一第四回訊問調書」『記録18』
- (32) 「実川清之第四回訊問調書」『記録12』。
- (33) 「秋笹正之輔第六回訊問調書」『記録19』。
- (34) 前掲「徳田球一予審訊問調書」172頁。
- (35) 「是枝恭二第四回訊問調書」『記録17』。
- (36) 「松本篤一第四回訊問調書」『記録18』、「清水平九郎第二回訊問調書」『記録12』、「学連関東連合会総則(草案)」(大原社研所蔵)。
- (37) 「岩田義道聴取書 第二回」『記録6』。
- (38) 「石田英一郎第七回訊問調書」「石田英一郎第八回訊問調書」『記録14』。
- (39) 長谷川博・田代文久「真のコミュニニスト・河上博士」306～8頁、小林輝次・堀江邑一・松方三郎・宮川実編『回想の河上肇』1948年3月、世界評論社。
- (40) 京都府警察部特高課「京大及同大社会科学研究会及出版法並治安維持法違反事件概況(一九二六年九月)」55、6頁、廣畑研二編『戦前期警察関係資料集 第4巻 知事事務引継書』2006年10月、不二出版。
- (41) 「岩田義道聴取書 第二回」『記録6』、「岩田義道第五回訊問調書」『記録16』。
- (42) 「プロレツトカルトに関するテーゼ」前掲『京都学生事件報告』。
- (43) 「橋本省三聴取書 第一回」『記録3』、「石田英一郎第六回訊問調書」『記録14』。
- (44) 「淡徳三郎第五回訊問調書」『記録15』。
- (45) 「栗原佑聴取書 第五回」『記録7』、「古賀二男第三回訊問調書」『記録14』。
- (46) 「山崎雄次第五回訊問調書」『記録16』、「池田隆聴取書 第二回」「黒田久太聴取書 第二回」『記

- 録9]、「橋本省三聴取書 第一〇回」「栗原佑聴取書 第一回」『記録11』。なお、泉隆の供述では起草委員が鈴木、岩田、山崎、泉となっている(「泉隆第三回訊問調書」『記録13』)。
- (47)「山崎雄次第五回訊問調書」『記録16』。
- (48)「蓮台恒治第二回訊問調書」『記録11』、「永井哲二第四回訊問調書」『記録13』。
- (49)「逸見重雄第二回訊問調書」「逸見重雄第三回訊問調書」『記録14』、「山崎雄次第五回訊問調書」『記録16』。
- (50)「研究コース」「新組織図解」『京都学生事件報告書』。
- (51)「橋本省三第八回訊問調書」『記録5』、「橋本省三聴取書 第一〇回」『記録11』。
- (52)「石田英一郎聴取書 第一回」『記録3』、「蓮台恒治第二回訊問調書」『記録11』、「永井哲二第四回訊問調書」『記録13』。
- (53)「宮崎菊次第三回訊問調書」『記録12』、「黒田久太第四回訊問調書」『記録14』、「淡徳三郎第四回訊問調書」「上村正夫第二回訊問調書」『記録15』。
- (54)「宮崎菊次第三回訊問調書」『記録12』。
- (55)前掲「プロレットカルトに関するテーゼ」。
- (56)「座談会 京大に社研が生まれたころ(下)——逸見・西山・栗原氏にきく」163頁、運動史研究会編『運動史研究 11』1983年2月、三一書房。一方で、東京の学生運動とのちがいとして西山(旧姓山崎)雄次は次のように語っている。「その当時、東京の新人会と京都大学の社会科学研究会とがちがうところは、言っちゃ悪いけれども、東京の新人会は雑然として、そう統制的に、だれはどこの労働組合のチューターに行けとか、そういうことはなかったんじゃないですか / 鍋山〔貞親〕 考え方は生意気だけれども、京都の諸君は実に献身的にやってくれるんだ。」(同上、162頁)。
- (57)「上村正夫第三回訊問調書」『記録15』。
- (58)「淡徳三郎第五回訊問調書」『記録15』。
- (59)「ア行 入学許可者名寄帳 一」『第三高等学校関係資料』(三高一1-28)(京都大学大学文書館所蔵)。
- (60)「明治廿三年九月以降 休学退学生徒番号簿」(三高一1-1690)前掲『第三高等学校関係資料』。
- (61)「上村正夫聴取書 第三回」『記録14』。
- (62)『第三高等学校一覧 大正十年四月起大正十一年三月止』一九二一年八月、第三高等学校、前掲『第三高等学校関係資料』。
- (63)「上村正夫聴取書 第三回」『記録14』。
- (64)前掲「ア行 入学許可者名寄帳 一」。
- (65)「上村正夫聴取書 第三回」『記録14』。
- (66)「上村正夫聴取書 第一回」『記録12』。
- (67)「上村正夫聴取書 第二回」『記録12』、「淡徳三郎第五回訊問調書」『記録15』、「岩田義道聴取書 第四回」『記録9』。
- (68)「淡徳三郎第五回訊問調書」『記録15』、「宮崎菊次第五回訊問調書」「上村正夫聴取書 第二回」『記録12』、「泉隆第四回訊問調書」『記録13』。
- (69)「淡徳三郎第五回訊問調書」『記録15』、「宮崎菊次第五回訊問調書」『記録12』。
- (70)「上村正夫第三回訊問調書」『記録15』。
- (71)「橋本省三聴取書 第四回」『記録3』、「石田英一郎第五回訊問調書」『記録14』。
- (72)「三高進化会 解散の経過報告に」『京都日出新聞』1925年10月14日付夕刊。解散に対する三高進化会と三高出身者(麻生久、細迫兼道、棚橋小虎、平貞蔵、山名義鶴、大宅壮一、山本宣治、水谷長三郎、京大社会科学研究会三高出身有志)の檄文はそれぞれ「檄!!」「母校一千の学生諸君に訴ふ 見よ!『自由』は畢竟^{ついに}に観念に過ぎなかつた!!」(大原社研所蔵)を参照。
- (73)「小樽高商軍教問題の反響 法衣の下にかくるゝ奸将の金具に社会科学連合会の糺弾 小樽高商軍教演習の想定に曰く敵は主義者と鮮人」『帝国大学新聞』1925年11月2日付。同資料は不二出版から1984年4月に復刻されたものを用いた。
- (74)「内海洋一第五回訊問調書」『記録13』、「石田英一郎聴取書 第六回」『記録6』、「石田英一郎第五回訊問調書」『記録14』。
- (75)「池田隆第四回訊問調書」『記録15』。
- (76)「宮崎菊次第四回訊問調書」『記録12』。
- (77)「淡徳三郎第六回訊問調書」『記録15』。
- (78)「宮崎菊次第四回訊問調書」『記録12』。

- (79) 同上。
- (80) 「無産者大学開講 京大社会科学研究会主催」『京都帝国大学新聞』1925年11月1日付。同資料は京都大学新聞社から1969年2月に復刻されたものを用いた。
- (81) 「石田英一郎第五回訊問調書」『記録14』。
- (82) 福本を招いたときの回想は前掲「真のコミュニスト・河上博士」311頁、「座談会 京大に社研が生まれたころ(上)——逸見・西山・栗原氏にきく」149～151頁(運動史研究会編『運動史研究 10』1982年8月、三一書房)を参照。
- (83) 「京都」2頁『青年大衆』1925年10月15日、選民社。
- (84) 渡部徹編『京都地方労働運動史(増補版)』337、8頁、1968年10月、第二刷、京都地方労働運動史編纂会。
- (85) 「宮崎菊次第四回訊問調書」『記録12』。
- (86) 京都帝大社会科学研究会、同志社大学社会科学研究会「家宅捜索、検束問題に就て全学学生諸君に伝ふ!!!」(山本宣治資料館所蔵)。
- (87) 「石田英一郎第八回訊問調書」『記録14』。
- (88) 同上。
- (89) ただし4名については出版法違反の公訴事実を免訴された。